

## ネリヤカナヤに流れる風

龍郷町立田小学校 四年 徳重 隆成

ネリヤ島はカナヤ海に面している。大昔から魚や貝、海そうなどが豊富で、人々はその恵を十分に受けていた。島の人たちは、毎日海に向かって手を合わせ、

「ネリヤカナヤの神様、今日もありがとうございます。」と感じやの言葉を述べることを欠かさなかった。ネリヤ島の人たちはみんな心が温かく、助け合って生活していた。ただ一人をのぞいて……。

ネリヤ島に住む五郎は、仕事もせず、毎日遊んでくっていた。おなががすいたら人の家に入り、食べ物をつそりとして食べたり、魚つりをしている人のかごから、魚を全部とって食べたりしていた。島の人たちも何かあるたび、

「またあの五郎のしわざだな。あんなことばかりしていると、いつかネリヤカナヤの神様をおこらせちゃうぞ。」

と言っていた。そんなうわさがあることを知っていた五郎だが、

「毎日遊んでくらせるのに、わざわざ働くなんで、ばかばかしい。」

と、ね転がりながら言うのが口ぐせだった。

そんなある日、五郎はいつものように、ぬき足差しで魚つりをしている三太郎の後ろに行き、かごの中から大量のアヤビキを自分のかごに入れ始めた。

「しめしめ。しばらくは飯の心配はしなくてもいいな。こんなにたくさんさんのアヤビキをつつてくれてありがとうよ、三太郎。」

と、心の中でつぶやき、またまたぬき足差しで帰ろうとした。と、その時、沖の方から

「ゴゴーツ。」

と、今まで聞いたことのない地ひびきのような音が聞こえてきた。びっくりした五郎がふり向くと、大きな大きな波が両手を広げておそいかかってくるどころだった。

「うわあ、大変だこりゃ。早くにげろ。」

と、三太郎はつり道具もそのままに、島中の人たちに聞こえる大声を出しながら、丘に向かってにげた。一方、五郎は、

「ううっ、重くて走ることができない。」

と、何としてでも魚が入っているかごを置いてにげることができなかった。

「うわあっ。」

あつという間に波にのまれてしまった五郎。丘の上から見ていた島の人たちは、

「ありや、神様がおこっているんじゃ。五郎がおこらせ  
ちまったんだ。」

と、波にのまれていく五郎を見つめ、悲しんだ。

みんながいる丘は無事だったけれど、畑や家は水びた  
し。みんなが深いため息をついたとき、

「何だ、あれは。」

みんなが見つめる海に、大きな大きな黒いかたまりがで  
き、それがよきつと水面に顔を出した。アヤビキの大  
群だ。なんと、その中央にはぶるぶるふるふるえる五郎がい  
た。

「五郎だ、五郎が生きている。」

島の人たちは、こしまで水につかりながら五郎を助けに  
走った。

「無事で良かった、五郎。はやくつかまれ。」

島の人たちは、悪さばかりする五郎だけど、放っておく  
ことはできず協力しながら助けた。

五郎を助けてしばらくすると、島の水も完全にひいて  
いた。そして、大きな大きな黒いかたまりのアヤビキた  
ちも見えなくなっていた。

「不思議なんだが……。波にのまれたおれは、海の中で  
苦しんでいたんだ。すると、おれが持っていたかごか  
らにげ出したアヤビキたちが、何千、いや何万びきも  
の仲間をつれてきて、おれを包んでくれたんだ。そし

て、ふわふわとおれをどこかへつれて行ったんだ。気  
付いたら、目の前には島中のみんなが汗を流しながら  
一生けんめい働く姿が広がっていた。心の声も聞こえ  
てきた。三太郎は、おれがさつき魚をぬすんでいるこ  
とに気付いていた。でも、心の中で『たくさん持って  
行つていいよ、五郎。』と言っていたんだ。その声を  
聞いたとき、おれは、心から反省した。他のみんなも  
同じことをして、同じことを心の中でつぶやいていた。  
おれは、悪さばかりしていたのに、みんなはおれのこ  
とを心から大切に思ってくれていた。ごめんよ、本当  
にごめんよ。」

それからの五郎は人がかわったように働き、島の人と  
も仲良くなった。夕方には海に行き、

「ネリヤカナヤの神様、今日もありがとうございます。

アヤビキ様、ありがとうございます。」

と言い、体の向きをかえ、

「島の方々、今日もありがとうございます。」

と、感しやの言葉を述べて笑顔を見せる。

ネリヤ島には、今日もカナヤ海からのおだやかな温か  
い風が流れている。